

「穴」の存在論を再検討するために

——ハイデガーとティム・オブライエンの視点から——

鈴木 康則（慶應義塾大学）

「何に対してもきちんと話を聴こうとしない人々」

T・オブライエン「本当の戦争の話をしよう」¹

はじめに

作家ティム・オブライエンはベトナム戦争への従軍経験をもとに、「戦争」について次のように語っていた。「多くの場合、本当の戦争の話というものは信じてもらえっこない。すんなりと信じられるような話を聴いたら、眉に唾をつけたほうがいい。真実というのはそういうものなのだ。往々にして馬鹿みみたいな話が真実であり、まともな話が嘘である。……ある場合には君は本当の戦争の話を口にするこゝとさできない。それは時としてあらゆる言葉を超えたものであるからだ」。²

オブライエンが語る「本当の戦争」というのは、彼が関わっていたベトナム戦争に限られるというわけではないだろう。過去の幾つかの大戦だけでなく、内戦、さらにはいわゆる「テロとの戦争」も含めれば、「戦争」は決して他人事というわけではなく、いついかなる場所でも生じうるような出来事である。オブライエンは、自身の戦争体験が「言葉を超えたもの」であることを承知しつつも、黙して語らないという態度は取らなかった。理解すること、そして理解されることの困難さについて、彼はおそらく自覚しつつも、「文学」によって語ることを選んだと言えるはずである。

ここでオブライエンが語る「言葉を超えたもの」が、今回主題となる「穴」に関連している。より正確に言えば、「穴」について語ったり、その性質を議論することは可能であるのだが、結局のところ「言葉を超えた」としか言いようのない事態が、哲学が主題とする「穴」に関連するように思われるのである。本稿では「物 (Ding, thing)」を論じたハイデガーの思索を、現代形而上学で主題化された「穴」の問題との関連で捉えたうえで、オブライエンの小説に登場する「穴」が哲学の分野においていかなる意義をもちうるかを検討する³。

「物」というのは例えば身近な「机」であり、「椅子」であり、「コップ」や「食器」でもある。それらが何であるかについては、その名称を告げ、用途を説明すれば事足りるように思われるし、またハイデガーの思想にある程度馴染みがある人は、「有意義性」や「指示連関」のもとで出会われる「道具」といった記述を思い浮かべるかもしれない。だがそれらの記述は「物」を「知っている」ことになるのだろうか。「物」を既知の事柄として扱うことは、自分が「きちんと話を聴こうとしない人」になる危険に陥るのではないだろうか。まずはハイデガーの議論を検討してみよう。

1. ハイデガーにおける「^{かめ}瓶」と「物」

本稿が主題的に扱う「物」講演⁴は、ハイデガーが一九五〇年にミュンヘンで行ったものである。加えて、翌年ダルムシュタットで行われた「建てること、住むこと、考えること」という講演の内容にも必要な範囲内で言及する。ミュンヘン講演に先立って、ハイデガーは一九四九年でのブレーメンでの連続講演においても「物」を主題としていたのであるが、内容の異同⁵についてはここでは立ち入らないことにする。

ではハイデガーの「物」講演の概略を辿っておこう。まずは「距離」の話から「近さ」と「遠さ」が話題となる。ハイデガーによれば、「映画」や「ラジオ」のおかげで「遠く」にあるものが「近く」にあるように思われることがあっても、それは「距離」が小さくなっただけで「近さ」となるわけではない(GA 7 167/16-17)。「距離」を縮めることでは「近さ」が生じないとするならば、「近さ」とは何なのか、とハイデガーは問う(GA 7 167/17)。

このように問いに付された「近さ」は、「物」との関連から探求される。「物」の例としてまず挙げられるのが「瓶(Krug)」である。なぜ「瓶」が例として提出されているのかについて、ハイデガーは特に説明をしていない。またハイデガーの「技術」論を主題とする研究の多くは、「物」講演の最初になぜ「瓶」が登場するのかという点について、その理由を考察していないように思われる。この点については後ほど立ち入ることにしよう。

ハイデガーによれば、「瓶」が「物」と呼ばれるのは「容器(Gefäß)」として機能しているからであって、「瓶」の「空洞(Leere)」あるいは「無」の部分が「瓶の本体」ということになる。「本来的に納めるはたらきをする部分が、瓶の空洞に存しているとすれば、ろくろ台をまわして壁面と底面を形づくる陶工は、ほんとうは瓶を製造していないことになります。陶工は、粘土の形を作っているだけです。いや、そうではなく——空洞の形を作っている、というべきです」(GA 7 171/24)。

この「空洞」に水やワインを注ぎ入れる場合、科学的知識の観点からすれば「空気」が「液体」に置き換わるということになる(GA 7 171/25)。このような科学的知識が「物」の把握にとって充分なのかどうかは問題となり、「原子爆弾」についても言及されつつ、「空洞の本質」が「捧げる」点にある、と論じられる(GA 7 173/30)。ハイデガーのいわゆる「四方界」⁶が語られた後、thing や res 等の語源的探求が提示され(GA 7 176-177/34-38)、「私たち」が「物」に呼びかけられており、その「近さ」にあるとされる(GA 7 182/48)。

「物」講演において着目されるのは「瓶」⁷である。だがなぜ「瓶」が話題となるのか。「瓶」でなくてはいけない理由があるのかどうか、少し立ち止まって考えてみたい。

ハイデガーが論じる「物」に注目する場合、それがどのような文脈において主題化されているのかについて、ここでは便宜的に三つのグループに分けることができるだろう。

第一に、「物」が備えている物体的形状および具体的な用途などに対して注意が払われないグループ。これは『存在と時間』で記述される様々な「物」が該当する。「道具」は「～のために」存在し、「机」や「窓」、「部屋」等、他の「道具」との「連関」の内にあるという指摘の際に言及される例が含まれる(SuZ 68)⁸。こうした例においては、「机」や「窓」の形状が記述されるわけではない。「手許的存在性(Zuhandenheit)」⁹の例として挙げられる「ハンマー」も、その形に注意が向けられるわけではなく、また「釘を打つ」という具体的な用途が特権的事例として扱われているわけではない(SuZ 69)。

「道具」としての記述以外にも、「アイデア」との関連で「机」等が語られたり(GA 6-1 153/150)、「ピュシス」の議論における例として「机」が登場する例(GA 9 251/309)、デュナミス／エネルゲイアとの関連で言及される例(GA 9 284-285/357-358)、「存在」と「存在者」の違いを考える際に言及される「チョーク」(GA 40 32-33/34-35)等、様々な「物」に言及されつつも、その形状等が記述されない事例が多くあることが確認できる。

第二のグループは、「芸術作品」との関連において「物」の具体的な形状が詳細に記述されるケースである。ここには「芸術作品の根源」で論究される「靴」が含まれる。「芸術作品の根源」ではまず「物」が主題化され、「瓶は物であり、路傍の井戸も物である」(GA 5/11)と論じられるが、「瓶」が具体的に論じられるというわけではなく、「道具」について言及された後に、ゴッホの描いた「靴」の具体的な形状が記述される。

第三のグループは「物」がその具体的な形状等について記述され、人間と当の事物との「近さ」が問題となるケースであり、「物」講演をはじめ、「ブレーメン講演」、『ハイデgger全集 77 野の道での会話』や、「建てること、住むこと、考えること」もこのグループにまとめて良いだろう。本稿が着目するのはこの第三のグループにおける「物」の記述であるが、上記のグループ分けはあくまで便宜的なもので、網羅的でないということに加え、厳密にその分け方が適切かどうかはここでは立ち入ることができない。たとえば「技術とは何だろうか」における「銀」は「皿」の材料として論じられ(GA 7 10/102)、「供儀」のために用いられるとされるのだが、「銀」を第一・第三のどちらのグループに数え入れるべきかは一考の余地があるように思われる。

第一のグループにおいて、「道具」としての「指示連関」を持つとされる諸事物が話題となるのだが、ハイデggerはこの議論に依拠し続けるのではなく、なぜ第二、第三のグループへの記述に移行したのかを検討する必要がある。

本稿が主題的に扱う「物」講演からすれば、「物」は「道具」として記述されるのではないことが確認できる。また「道具」という語は「ブレーメン講演」(GA 79 28/37)や「技術とは何だろうか」(GA 7/97)に登場しているとはいえ、「指示連関」や「全体性」と関連づけられることはなく、『存在と時間』での記述の仕方と全く異なる。「手許的存在性(Zuhandenheit)」および「事物的存在性(Vorhandenheit)」という『存在と時間』での対比からすれば、「物」講演は「手許的存在性」から「事物的存在性」へと記述の比重を移したように見えるかもしれない¹⁰。ただし本稿はこのような観点を採用しない。ハイデggerは『存在と時間』において「事物的存在性」を「手許的存在性」の「欠如」態として記述していたのだが(SuZ 73)、門脇は「事物的存在性」は「適所性(Bewandtnis)の抹消」あるいは「コンテクスト性の無効化」¹¹と結びついていて重要な点を重要視する解釈を提示していた(門脇 171-173)。筆者の理解では、「適所性」と「道具」という観点で「物」を理解することは、当の「物」が持つ個別の形状・機能に関心を持たない¹²。門脇の解釈に従うなら、『存在と時間』でのハイデggerは「適所性」という視点のみで「物」を記述していたわけではない。本稿では門脇の解釈を手掛かりに、「適所性の抹消」がただちに「事物的存在性」を重視することとは別である、と考えておきたい。というのも「それ自体」という表現が「物」講演に見出されるが(GA 7 168/19)、ハイデggerは「事物的存在性」としてその記述を採用しているわけではないからである。ハイデggerの「物」講演における「そ

れ自体」としての「物」というのは、あくまで「大地」から「制作」によって立てられるという主旨であって、そのような記述は『存在と時間』で論じられていた「事物的存在性」の内実にはそぐわないと思われる。

「物」講演で着目される「瓶」は、さしあたり「事物的存在性」としてではなく、「物理学」などの「科学的知識」の観点から考察されている(GA 7 171-172/25-26)。この観点によれば、「瓶」の内部は「空洞」ということになり、「陶工」は「空洞」を「制作」する、という不可解な記述が生じてしまう(GA 7 171/24)。こうした記述の不十分さについて、ハイデガーは「瓶の空洞」について「熟考しなかった」と述べ(GA 7 173/28)、「捧げる」ことや「四方界」への議論に移行する。

「物」講演での「瓶」に着目した森一郎は、ここでのハイデガーの記述を「空洞の現象学」と見なす解釈を提示しており(森 66)、本稿はこの見解に多くを負っている。ただしハイデガーの語る「空洞」はあくまで不十分な記述としてなされていたことは念頭に置かねばならない。「空洞の現象学」はハイデガーからすれば「物」に対しての不十分な態度であって、「捧げること」等の関心をもって考察される限りで重要視されるものなのである。言い換えれば、ハイデガーにとって「空洞の現象学」は記述されるけれども克服されるべきものである、ということになる。

2. 「空洞」と「境界」の現象学—— セーレン・リースの解釈から見えてくるもの

ここで少し立ち止まって考えてみたいのだが、「物」講演において「空洞」(あるいは「空洞の現象学」)はどの程度の重要性を持つのだろうか。いかなる「物」も「空洞」を持つとするならば、(否定的に扱われるとしても)「空洞」を論じることは「物」一般についての理解に資するところがあるように思われる。だが「瓶」という事例がどこまで一般的なものなのか、あるいはハイデガーはなぜ「瓶」という例を選んでいるのか、何らかの説明は可能なのだろうか。

「物」講演での議論に従うなら、「瓶」は「四方界」(「大地」「天空」「神的な者たち」「死すべき者たち」と関連し、「供儀」や「捧げること」という意義を担わされている。ハイデガーが「物」の事例として「瓶」を選ぶ理由として、「四方界」との関連を念頭に置くのは議論として一見すると自然なように思われる。この点について、ハイデガーの技術論を扱ったセーレン・リースの議論を手掛かりに、「瓶」の問題を論じてみよう。

リースはハイデガーの技術論における「瓶」を重要視するのだが、それは「瓶」が「空洞」を持つという議論に着目するからではなく、「神」的なものと関連する「供儀」という性質を持つ点に重きを置くからである。ハイデガーによる論考「芸術作品の根源」の冒頭では「物」が論じられ、「芸術作品」および「神殿作品」が語られるという議論の流れを踏まえ、リースは次のように述べている。「[瓶のような] 備品は芸術作品と同様に、制作者の意図から切り離されうるのであって……それは芸術作品の一つとして見なされうるし、思考されうるのである」(Riis 133)。

リースはかなり性急な仕方で「芸術作品」と「備品(equipment)」を同一視する。なぜ性急かと言えば、「物」講演での「瓶」は「芸術」とは論じられていないからなのだが、リースが両者

の同一性を主張するに至るのは、「神」が「瓶」および「芸術作品」と関連することを強く読み込む点にあると思われる。リース曰く、「ハイデガーが神殿について理解していることにとって重要なのは、神殿自体が神的なものではなく、むしろ「神殿を通じて、神が神殿の内に現前すること」(GA 5 27/38)である。供儀の瓶と同様に、神殿は神が現前するための一種の装置として、すなわち神の一つの備品として叙述されうる」(Riis 134)。

ここでリースの解釈を取り上げたのは、その性急さを問題にしたいというわけではなく、「瓶」が登場する議論のポイントとして、「四方界」あるいは「供儀」の要素を読み込み過ぎると、リースのように「瓶」そのものの位置づけが不要になる危険性が生じる、ということを確認せんがためである。リースは結局のところ、「ハイデガーの理解においては、備品と芸術作品の違いは偶然的である」(Riis 137)とまで言い切ってしまうのだが、こうした理解が生じてしまうのは、「瓶」の「空虚」、言い換えれば「空洞の現象学」に注意を払わない解釈が陥る危険性を示しているように思われるのである。

ハイデガーの技術論を論じる森一郎は「瓶」の議論から「四方界」へと話を進めるのだが、ハイデガーが「捧げること」に言及する地点において、「現象学的記述の転換点」が生じていることを指摘している(森 68)。「空洞の現象学」で始まる議論が、突如「天空と大地の婚礼」などの記述へと移行することによって、「面食らう読者も多い」ことも森は注記している(森 68)。この「記述の転換点」は「瓶」の議論にとってどの程度必要なのか、そして「記述の転換」に先立つ「空洞の現象学」は「物」の議論にとって必要なかどうか、検討せねばならない。

本稿での主張は、「四方界」の議論はさておき、「空洞の現象学」は「物」の議論に欠かすべきではない、というものである。なぜそう主張したいかといえば、「建てること、住むこと、考えること」で扱われる「橋」についても、「空洞」という語は登場していないにもかかわらず、「瓶」と同じような「空虚」無しには「橋」は「橋」たりえない、と思われるからである。

講演「建てること、住むこと、考えること」において、ハイデガーは「四方界」に言及したうえで、「住むこと」と「物」との関係を重要視する。「物たちのもとでの滞在こそ、四方界における四重の仕方での滞在がその都度統一的に成し遂げられる、唯一のあり方にほかならないのです」(GA 7 153/73)。この「物」の例として挙げられるのが「橋」である。ハイデガーは「両岸」がまずあって「橋」が架かるというのではなく、むしろ「橋」によって「両岸」が出現すると述べて、さらに「橋」や「川」の風景を論じる(GA 7 154/74-75)。「橋」が「両岸」を生み出す点、そしてその美的外観を論じる点は、実はジンメルがそのエッセイ「橋と扉」で論じていたことでもあった¹³。だがジンメルとは違い、ハイデガーは「橋」が「物」としての「取り集め」を行う点(GA 7 154/75)、そして「橋」それ自体が「空間」を「空け渡す」点を論じている(GA 7 156/78)。

この場面において「橋」が「空間」を持つとされる論点が本稿にとっては重要であるが、もう一点、「境界」の重要性に言及される点も見逃せない。「境界とは、そこから何かはその本質を発揮し始める起点なのです」(GA 7 156/79)とハイデガーは語っている。「橋」と「境界」の次に「建物」および「家」へと議論が移行するのだが、まず「橋」は「間の空間」とも呼ばれる(GA 7 157/80)。ハイデガーの議論に即した言い方をすれば、森が整理するように、「橋」は物質として「建てられ」ることによって「四方界」に「宿り場」を提供し、そこにおいて「空

間」が「取り集め」（「空間」は「橋という種類の物によって、取り集められるのです」（GA 7 156/79））られる、ということになるだろう。

「橋」の議論においては「境界」と「間の空間」に言及されているのだが、この論点は「物」講演での「瓶」にも当て嵌めることができるのではないかと、というのが本稿の立場である。さらに言えば、「瓶」と「橋」の両者ともに「四方界」への関連を持つとされるのだが、ハイデガーの議論には、物質的次元での「境界」、「間の空間」（「空洞」）が連続的に「四方界」へと関連させられているが、森の指摘に従い、「現象学的記述」の転換が生じていると考えたい。言い換えれば、「瓶」および「橋」の議論には、「境界」と「空洞」の現象学の部分、そして「四方界」の議論が合わさって成立していると思ってみよう。このような視点を持つことによって、「瓶」や「橋」はそれらの事物以外での議論にも当て嵌まるようになると思われるからである。ハイデガーによる「物」についての議論において、「瓶」「橋」「家」¹⁴だけが特権的な位置を占めているのではなく、「物」を「物」たらしめているのは「境界」と「空洞」という要素である、というのが本稿の見立てになろう。「瓶」の議論において何が議論の眼目なのかが判断できない場合、「物」はその都度特有のあり方において考究されねばならないが、それはおそらくハイデガーの企図ということにはならないはずである¹⁵。だからこそ、「瓶」や「橋」の議論の要点が奈辺に存するのか、解釈を提示する必要があったのである。

3. 現代形而上学における「穴」の問題

ここでの「境界」と「空洞」の現象学というハイデガーの観点が、現代形而上学における「穴」の問題に資する点があるのではないかと、というのが本稿の問題提起である。加地はその著作『穴と境界』において、「穴」が「空洞」であり、かつ人間の生に欠かせないという論点を提示している。「部屋は通常、「家屋」というより大きな空洞の一部分である。その家屋が位置する私たちの居住地域も、原始的野生の荒野の中に開けられた一種の穴であるといえるかもしれない。生物が生を安全に確保するためには、多かれ少なかれ何らかの囲い込みを行わなければならないとすれば、「環境」というものは、本質的にすべて「穴」的な構造を持たざるを得ないだろう

（加地 33）。だが「穴」が至る所に「存在」するように見えても、「穴」は実は「空洞」であるから、「穴」の「存在」が問題になってしまう、というのが加地による整理である。「穴」を穴たらしめる一つの本質的要件は、そこに何も無いということである。穴は無によって存在する、という逆説的構造がそこにはある。また、穴が存在するとすれば、それは時空間の中に存在する以上、「具体的な対象」であるはずである。しかし、それは「物理的な対象」すなわち「物体」であると言えるだろうか？むしろ物体の欠如によってこそ穴たり得るのだとすれば、やはり物体とは言えないのではないかと。もしも言えないとすれば、穴の存在を承認することは、「非物理的な具体的対象」の存在を承認することになる」（加地 34-35）。

「穴」の問題にアプローチするに際し、加地は「考え方次第」「どちらでもよい」というような態度を採用しない。「どこまでも考え方次第ということはある得ない……考え方の幅には常に限度がある。その限度は、他の事柄に関する諸々の考え方との整合性によって、そして何よりも実在によって、制限される。したがって、考え方次第という答えを与える者は、どの程度

まで考え次第なのか、ということを示す義務がある」(加地 46-47)。

「穴」の「存在」を検討する際に、加地は先行研究から幾つもの論点を引き出しつつ興味深い議論を続ける。「タイヤ」や「ペーパー・ロール」等の「具体的個体」(加地 42)であれば、質量を持った物質部分は「移動」や「回転」が可能である。だがその場合、物体に付属しているように思われる「穴」も、同様に「移動」や「回転」が可能なのだろうか。

例えば「穴」は「移動」し、かつ「回転」するという立場を採用する説としては、ルイス夫妻は「内壁(hole-lining)」¹⁶説を主張する。「穴」を「穴」たらしめているのは、「穴」を支えるように見える「内壁」に他ならないとする考え方である。この説によれば、「穴」は存在しているのではなく、存在しているのは「穴」を構成する「内壁」や「表面」である、と整理できよう。この説に従うなら、「穴」は「回転」するし、かつ「移動」も可能である。だが筆者の見たところ、「穴」が「移動」や「回転」をしているのではなく、単に「内壁」が「移動」「回転」しているだけで、「内壁」説は「穴」を記述していない。

加地は「内壁」説以外にも、「否定的部分説」(ホフマンとリチャーズ、加地 58)、「欠如体説」(ホフマンとローゼンクランツ、加地 66)、「依存的非物質体説」(カサティとヴァルツィ、加地 76)を検討し、自らの立場を「依存的形相体説」(加地 85)としている¹⁷。加地によればこの説による「穴」は、「移動はできても回転はできない対象」(加地 90)として扱われる。

「移動」が可能となるゆえんは、「穴」の「外的境界」が移動できるからである。「回転」ができないのは、「回転」は「穴」の形状を変化させるとしても、「回転」はその物体としての「ホスト」が「回転」しているのであって、「穴」が「回転」するわけではない、と考えられるからである¹⁸。

これらの事例については柏端が明快かつ有益な整理を提供してくれているのだが、ここでは本稿の観点から加地の立場について評価してみよう。「瓶」は「空洞」を持つのであるから、加地が論じるような「穴」と同じような身分を持つ存在者である、と考えられよう。「瓶」を回し、移動させる際に、その「空洞」は「回転」し、「移動」しているのだろうか。

加地は「穴」が「動く」ことに疑念を挟まない。「穴」はもちろんできごとではないし、空間領域とも異なる。なぜなら、穴は動くことができるからである。私が動けば私の鼻の穴も動く。ピンポン球が投げられればその中の空洞も動く。しかし、最初に私の鼻の穴や球の空洞が位置した空間領域そのものが動くことはない(加地 42)。

ハイデガーの議論において、「瓶」の中を「空洞」を理解することは、当の「瓶」を把握するには「不十分」な記述とされていたことがここで重要になる。加地の言う「鼻の穴」や「ピンポン球」においてはその「空洞」的部分は確かに「移動」可能であるようにも見える。だが「橋」の事例ではどうだろうか。「橋」はその物質的部分の上を人や車が通行することで「橋」たりえるであって、「橋」はいわばその上に「空虚」を持っているはずである。奥多摩湖の麦山の浮橋のように、「橋」自体が若干の「移動」が可能である場合、「橋」が持つとされる「空虚」は「橋」と同時に「移動」するのであろうか。ここでの議論のポイントは、「瓶」の中を「空虚」や「穴」(の一種)として扱う観点は、対象の記述としては不十分になる、という点である。

ハイデガーの観点において、「空虚」という記述は「科学的知識」が持ちうる観点とされていたのだが、加地による整理が教えてくれたように、実は「空虚」という記述にも様々な理解が

存在するのであって、「科学的知識」というハイデガーの整理が行き届いたものであるとはいえない、ということになる。

では「穴」という「存在」に対してはどのように向き合うべきなのか。「穴」あるいは「空虚」は「物」との関連において生じてしまうのだが、ハイデガーの「物」はどのような方向性を持っているのだろうか。この点について高屋敷はハイデガーの記述の内に、「物」の「振る舞い」が見出せるという興味深い論点を提出している（高屋敷 6-7）。高屋敷は「物」（ここでは「恵みの樹」）が「世界」を担う点と、「四方界」への指示が行われている点に言及している。高屋敷は言及していないが、ハイデガーは『言葉への途上』においては、単に「事物」と記すだけでなく、「パンと葡萄酒」という具体例も挙げていた(GA 12 25/25)。ここでハイデガーは「空洞」等には言及せず、「物」が「言葉」によって、「純粹に事物としてあることによって輝く」(GA 12 25/26)とされる。「世界と事物の親しさを生じさせるような根源的な呼びかけ」(GA 12 25-26/26)にハイデガーは注意を促すのだが、「事物」はそれ自体で性質を帯びているというよりも、「言葉」によってその何らかの存在する仕方へと呼び出されている、と記述すべき事態に関心を向けていることになるだろう。ハイデガーにおいては「空虚」それ自体は関心の主要な対象ではなく、その「物」が「物」として機能を持つ（たとえば「瓶」ならばその「空洞」が供儀としての働くこと）地点に注意が向けられている。

では「穴」それ自体というのは記述の対象としては不適切ということになるのだろうか。ここでようやくオブライエンとの関係を持ち出す地点となる。

4. オブライエン『ニュークリア・エイジ』における「穴」の意義

ティム・オブライエンによる小説『ニュークリア・エイジ』¹⁹は、「岩穴」について描写される第二エズラ書（エスドラス書）のエピグラフが掲げられている。内容やあらすじについてはここでは省くとして、核の時代に一人の男が苦しみながらも生きる姿が描かれる。

この小説に冒頭から最後まで登場するのが、主人公が庭に掘る「穴」である。主人公が「穴」を掘っているのは確かだが、彼がその主導権を握っているわけではない。「掘れよ、と穴が言う(the hole says)」のであって(NA 21)、彼はそれに応じているだけで、とも見えるからである。その「穴」がいかなる目的のために掘られているのかについては解釈の分かれるところではあるだろうが、本稿では「何のためかは分からない」と考えておこう。

娘のメリンダは「穴」を掘る目的を尋ね、主人公は「シェルターだよ」と答える(NA 17)。主人公は核戦争の恐怖に怯える少年として描かれていたのだから、彼が大人になってから掘る「穴」も同様の役割の「ために」掘られていたとも考えられる。一九八六年に『ニュークリア・エイジ』に寄せられた書評では、主人公は「自身の悪夢を取り除くため、家族のための核シェルターを掘り始めた」と書かれている(Mulvihill 169)。だが私見では、この見方は「穴」の存在をわかりやすい次元に回収し過ぎている。この小説が担っている「穴」は、単なる「シェルター」という役割には収まっていないはずなのである。

この作品では「穴」が様々なセリフを語るのだが、決して荒唐無稽な内容というわけではない。「なあ、おい、と穴が言う……ここにあるけどここにはない、存在するけど存在しないものっ

てなんだ？……俺は不在の存在であり、存在の不在だ」(NA 361)。ダニエル・コードルが二〇〇七年に書いた『ニュークリア・エイジ』論においては、「冷戦」という政治的意義を主人公の行動と重ねる観点が提出されている。主人公が「穴」に爆弾を仕掛ける点について、「相互確証破壊という核政策戦略において採用されたものと同様の、攻撃的かつ自殺的な態度」(Cordle 112)とされるのだが、こうした観点では主人公が一種の「政治」や「政策」と同様の思考や計算に基づいて行動しているかのように見えてしまう。もちろん「政治」が既に自己破壊的で、思慮もなく行われているという観点なのかもしれないが、その場合でも「穴」が主人公に対して持っている意義が見て取られていない点が問題である。

鉛筆を集めて「シェルター」を作っていた少年が、その後に行動できたことといえば、「爆弾は実在する(THE BOMBS ARE REAL)」(NA 137)というプラカード掲げ、一人孤独に「カフェテリア」の入り口に陣取ることであり、同志と共に地下活動に参加することであり、最終的には「穴」を掘ることだった。主人公は「死」を恐れるが、ただし自分の「死」を回避するためのエゴイスティックな行動に終始しているわけではない。唇の腫瘍が進行してしまうサラが「私、死んでる！」(NA 532)と叫ぶように、この作品には「死」が至る所に散りばめられている。「核爆発」のみならず、こうした身近に押し寄せる「死」への予感から逃れられない主人公ウィリアムにとっての「穴」は、或る時には「聖書」の一節を語り、さながら「神」のように振舞う。「我々は在りて在る者なり。ほとんど在ったことがありながら、永遠に在ることのないもの。一度も在ったことがないのに、永遠に在り続けるであろうもの」(NA 543)。

ウィリアムは「穴」の中で安心する場面も描かれるのだが、だからといって「穴」は彼にとって心休まる場所ではない。絶えず「穴」との会話に苛まれる様子は、彼が「穴」に取り憑かれているとも読み取れる。『本当の戦争の話をしよう』に含まれている「私が殺した男」という章で、主人公は自身が殺した男に空いた「穴」を見つめ続ける。その男の片方の「目は星の形をした穴(a star-shaped hole)」になっていて、主人公がそのありさまから目を離せない様子が繰り返される。同僚から「見るのはよせ」と止められるにもかかわらず、主人公は「星の形をした穴」を見続ける。これはいわば「穴」に魅入られているのであって、主人公は自らそう願って「穴」を見たいというわけではないはずである。では『ニュークリア・エイジ』での「穴」はどのような意義を持つのだろうか。

この問題を考える手掛かりの一つは、エピグラフの中に登場する男である。その男は「他者の姿」と「声」を求めている。この小説の主題は一見すると「核戦争」とその恐怖のようにも思われるのだが、ウィリアムが探し求めるのは「他者の姿」と「声」がある場所、すなわち「家庭」であるとも読めるのではないか。チアリーダーだったサラは、ウィリアムの家族に対し「家庭、素晴らしい家庭(Home, sweet home)」(NA 525)と語るのだが、その言葉に対応するかのようになり、「穴」は「家庭、素晴らしい穴(Home, sweet hole)」(NA 540)²⁰と皮肉めいた言葉を吐く。

「穴」を掘ることはウィリアムなりの居心地の良さ、すなわち「家庭」の探求でもあり、他人の「声」を求めるやり場のない行為でもあったのだが、そこから聞こえる「穴」の声はウィリアムの求めたものではなく、結局そこに爆弾を仕掛けざるを得なくなってしまう。

「穴」が登場する文学作品はもちろん『ニュークリア・エイジ』に限られるわけではないのだが²¹、「穴」は人間にとって既知の存在というわけではなく、未だ知られざる側面があるので

はないか。物質的な側面として「穴」のあり方を適切な「直観」でもって記述する、という課題も実は難しい。加えて、「穴」が本来いかなる機能を持つのかについても、ただちに合意しうるような「本質」を見出すことも難しい。

5. 「穴」をどう考えるか——ハイデガーとオブライエンを手掛かりに

『ニュークリア・エイジ』に登場するような「穴」は、果たして現代形而上学が語る「穴」と関連しうるのだろうか。この点については、まず柏端による指摘を引用しておこう。「穴が回転するかどうかについて、われわれが前理論的な直観をろくにもっていない点をまず確認しておきたい。穴を塞げ、穴を広げろ、穴が崩れないよう補強せよ……こうした命令において何をしろと言われているのかは明白である。だが、穴を回せと言われたとき、いったい何をすればよいのだろうか。ドーナツそのものを回せばよいのだろうか」（柏端 66）。

この指摘はおそらく重要で、同じ事態は「穴」の「移動」にも当てはまるだろう。加地は「穴」の「移動」を可能であると見なしているが、事物は「移動」できても「穴」が移動していとは言えないケースがあるというのは、先ほど指摘した通りである。『ニュークリア・エイジ』に登場するような、庭に空いた「穴」を想像してみても良い。その「穴」を「数メートル移動してほしい」と言われた場合には、元の「穴」を埋めて別の場所に「穴」を掘るだろう。それは別の「穴」であって、「穴」が「移動」したわけではない。

柏端は「穴を塞げ」というような命令が「明白」であると記述しており、この点には同意するのだが、もしそうだとすれば「穴」についての「直観」をもたずとも、「穴」が一種の対象であるという点は共有されているはずである。柏端は「穴」を立体における「対角線」（柏端 80）と同様の存在と見なし、「穴」は一種の「抽象的」存在であると考え、「われわれが住むこの具体的な世界に穴は存在しない」（柏端 82）と結論づける。柏端が「プレツェルも表面はでこぼこしている」（柏端 82）ことに注意を促すように、パンや机でも多少の盛り上がりやへこみは観察されるわけで、その状態を柏端は「穴がある」とは見なさない。本稿なりに言い直すなら、物体の表面について「周囲よりも減って見える部分がある」と記述することは可能である。だが当の部分（「穴」）に見合う適切な「直観」が不明であるとしても、「穴」が具体的には「存在しない」というのも「直観」に反する記述になってしまうのではないか。

『ニュークリア・エイジ』での「穴」は「シェルター」というわけではなく、むしろ「穴」であることが本来のあり方であるように描かれていた。人間にとって、「穴」は何らかの「空虚」や他の目的のための付随的存在、あるいは「抽象的」存在として扱われるのではなく、「穴」それ自体を対象であるかのように見なしているはずである。例えば壁に空いた「欠落」「空間」（「穴」）に対し、「穴を塞げ」という命令をするのは自然であるが、「壁を延長しろ」とは言わないはずである。「壁が無いその部分に壁を作れ」という命令は可能であろうが、結局それは「穴」に対して別の名称を割り当てているわけで、「穴」的な存在として扱われるはずである。

まとめと課題

これまでの流れをまとめておこう。ハイデガーが「物」講演で注目していた「瓶」は、森が指摘するように、「空洞の現象学」と呼びうる探求を展開していた。私見では、この探求は「建てること、住むこと、考えること」で論じられる「橋」にも展開されており、「境界の現象学」も必要となる。「空洞」と「境界」の「現象学」は、「物」一般の「存在」の問いに繋がるもので、個々の「物」についてそれぞれの「現象学」が必要とされるわけではないはずである（たとえば「はさみ」「ハンマー」「耳かき」といった事物に対し、それぞれ固有の「現象学」が必要とされるわけではないだろう）。

ここでのハイデガーの知見は、現代形而上学における「穴」の議論と無関係ではない。この議論は「空洞」に対しどのようなアプローチをとるのが問題となるからである。「空洞」として「物」を記述することの不十分性をハイデガーは指摘しており、この点は「穴」の議論に資する点はある、というのが本稿の見立てである。だがハイデガーのように「空洞」から「四方界」へ話を持ち出すことで、現代形而上学の論者たちを説得できるだろうか。この点については、「四方界」が実は説得的な材料である可能性を探求する方向と、「四方界」以外にもハイデガーの「物」についてさらに議論を深める余地を探求する方向が考えられるが、筆者としてはまず後者を課題と考える。今回立ち入ることのできなかつた「芸術作品」論においても「物」についての議論がなされており、「空間」と「人間」、「物」との関連を考えねばならない。秋富の指摘するように、「作品」たる「エルゴン」は「デュナミス」「エネルゲイア」と共に、「真理」概念との関連においてハイデガーは論じているのであって（秋富 93）、デリダの「パレルゴン」概念²²と今回の「物」論をどう結び付けてゆくのが今後の課題である。

本稿が『ニュークリア・エイジ』の「穴」を扱った理由は、フィクションであるにしても「穴」が人間にとって一種の「リアリティー」を持ちうるという点を示したかったからであり、ハイデガーの技術論における「原子力」の問題²³と結び付けようとする意図はない。現状のところ、「原子力」および「技術」の問題が筆者の手には負えないという事情もあるが、『ニュークリア・エイジ』の主人公が「核」や「原子力」という「恐るべきもの」に対し、あくまで「穴」という個人的な事象との格闘が提示されている点を高く評価したいからである。これはもちろん文学的嗜好の問題になってしまうのだが、哲学の問題としてもハイデガーの「原子力」よりも、「物」講演のうちの「瓶」、そして「建てること、住むこと、考えること」での「橋」の持つ意義と何か結び合う点があるように感じたということがある。後者の論点の射程およびハイデガーの思索における意義についても今回整理しきれたわけではないのであって、今後の課題とせざるをえない。

「穴」は人間にとっていかなる意義を持ちうるのか。「穴」が人間にとってはいわば「言葉を超えたもの」であるにもかかわらず、何らかの意義を持ちうるということ、筆者は作家の色川武大による小説『百』から読み取るのだが、その成否については措くことにしておこう。

「……戦争が押しつまった頃、父親が不意に畳をあげて、家の床下に穴を掘りだしましてね」
「穴を——」

「ええ。はじめ家族は、防空壕を掘りだしたと思ったし、実際そう見えたんですが、そうじゃありませんでした。彼はそれからずっと、戦争が終わるまで、気が狂いでもしたように穴を掘

り続けましてね。家のどの部屋の下も穴ぼこだらけにってしまったんです」……

「それは、怒りのせいでしょうか。それとも屈託とか、不安とか——」

「わかりません。多分さまざまなものに追いつめられて行って、そうするよりほかなかったの
 でしょう。しかし僕はそのとき、その穴ぼこを眺めていて、これは彼そのものだと思います。
 こんなふうに、とことんのところへ来て、具体をずっと出せる男というのは凄い奴だな、と痛
 感したんです。玉葱の皮を剥くようにして、我々の内心を剥いていくと、ひと皮ずついろんな
 ものが現れますね。内心とひとくちにいても、概念的なところもあるし、前代から受けつい
 だようなものもある。それを身幅の中に入れて自分の心に行っているわけでしょう。そうして大
 方は、芯まで剥きません。剥くのを中止したり、死んだりしてしまうわけです。父親は、自分
 で芯まで剥いていくのです。そうして芯のところ、穴掘りというちゃんとした具体があるの
 ですね。僕ははじめて、本当に父親を恐ろしく思いました」（色川 209-210）。

1 『本当の戦争の話をしよう』、一四〇頁。

2 『本当の戦争の話をしよう』、一二〇 - 一二一頁。

3 ハイデガーと「文学」の関係という主題を考察した例として、串田はリルケの作品からハイデガーを解釈するという興味深い読解を試みている（串田 218ff）。串田の読解がハイデガー理解にとって「内在的」なものだとすれば、本稿のようにハイデガーと関係の無い作品を論じるというのは「外在的」ということになる。ただし「物」についての議論をはじめ、本稿はハイデガーの議論が「外在的」な射程を持ちうる点を示すことを企図している。

4 「物」講演および「建てること、住むこと、考えること」については、ハイデガー全集版の頁数と『技術とは何だろうか 三つの講演』での頁数を記しておく。

5 この異同については、稲田および『技術とは何だろうか』に含まれる森一郎による「編訳者まえがき」を参照。

6 「四方界」については『ハイデガー事典』三四九頁参照。

7 なお管見の限りでは、「瓶」という語は『存在と時間』には登場していない。

8 一九二三年の講義『事実性の解釈学』において既に「机」という例をもとに、「日常的世界」の誤った記述、そして適切な観点としての「手許的存在性」が語られていた。この講義の末尾部分では「鋤」や「家」と並んで「瓶(Krug)」が挙げられているが、「瓶」の特徴等についてのより詳細な記述はなされていない。

9 「手許的存在性」という訳語については『ハイデガー事典』に従った。同書三九八頁参照。

10 ハイデガーが「手許的存在性」についての記述から、後に別の仕方での考察を始める点について、荒畑は以下のように述べている。「有意味なものの総体としての世界は、いずれ後年のハイデガーがみずから認めることとなるように、手許的存在者間の差し向け連関だけからは構成できないし、またいずれにせよ、多くの論者が指摘しているように、彼が「眼前性(Vorhandenheit)」と呼ぶ存在カテゴリー——伝統的には客観性ないし対象性と呼ばれてきたもの——が派生的でしかないかのように考えることは、やはり無理なのである」荒畑、一五五頁。

11 門脇の用いる「コンテクスト性」という表現には若干の問題が生じることを指摘してお

きたい。「物」講演において「瓶」は「それ自身」で「立つ」のであるが、それはあくまで「道具」の「指示連関」としての「コンテクスト」が「無効化」されるというだけで、たとえば「瓶」は「捧げる」ことにおいて「四方界」との「コンテクスト」が保持されることも記述できるからである。「コンテクスト」と表現するよりも、「道具的支持連関」が「無効化」あるいは「抹消」される、と記しておく方が誤解はより少ないと思われる。

12 「関心を持たない」という点について、ハイデガー研究の文脈では「無差別相 (Indifferenz)」(『ハイデガー事典』四二八頁参照)と関連する。須藤はこの「無差別相」が「本来性」「非本来性」といかなる関係にあるのかという鋭い問題提起を行っており(須藤 11)、Indifferenz にどのような訳を与えるべきかという点を深く掘り下げる点において、気づかせてくれる点が多かった。ただし私見では、須藤のように「本来性」および「非本来性」そして「先持」と「先視」の間の厳密な区別に固執すると、「非本来性」と「本来性」がそもそも関係しうるかどうかが理解しづらくなってしまいうように思われる。

13 「……橋は私たちの意志の領分が空間を超えて拡大していく姿の象徴となる。川の兩岸が離れているだけではなく、「分離されている」と感じるのは私たちに特有のことだ。もし私たちが、私たちの目的思考や必要性や空想力のなかで兩岸をあらかじめ結びつけていなかったとしたら、この分離概念はそもそも意味をもたないだろう」(Simmel 56/92)。「きわめて一般的に言えば、風景のなかの橋はひとつの「絵画的」要素として感じられる。というのも、橋によって自然的所与の偶然性が、完全に精神的な性格のものとはいえ、ひとつの統一性へと高められるからだ」(Simmel 57/94)。本稿の見るところでは、ハイデガーの「橋」論とジンメルの思考との共通性は見て取れるのだが、管見の限りではハイデガーがジンメルのエッセイに肯定的に言及している箇所は見出せなかった。ハイデガーによるジンメル評については『ハイデガー事典』四七六 - 四七七頁参照。

14 「家」も「橋」と同様に、「空虚」が無ければ「家」たりえない。ただしハイデガーは「橋」とは違い、「家」が「住まう」ものであることに着目する。この点について河野哲也は『境界の現象学』の第七章において、ハイデガーの「家」論についてフェミニズム観点のみならず、「ヘスティア」および「ウィルダネス」という視点からの興味深い考察を行っている。「ヘスティア」については、小田切が河野のハイデガー論に寄せた論評も参考になる(小田切 16-18)。

15 ここでの筆者の立場は、ハイデガーによる「瓶」や「橋」の記述が単に該当の対象のみに当て嵌まるというわけではなく、「物」一般を見据えている可能性を持つと解釈するものである。筆者によるこの解釈は、門脇が『理由の空間の現象学』において、「可能性の先行的制約という存在論的ア・プリオリ」を「事物的存在者」との関連で考察し(門脇 168)、同時に「存在論的ア・プリオリ」を「改訂」する「思考の動き」をも見据えるという視点に(門脇 176)、多くを負っている。門脇の視点は、クリチリーのように「事物的存在者」の位置づけを重要視しない解釈(クリチリーは「自然的態度は……眼前的な態度をもって」、経験を「非現象学的に歪曲すること」(クリチリー 42/65)と述べている)に比して、「物」講演理解にも役立つ視点を提供している、と見なしうるだろう。

16 「内壁」という訳語は柏端によるものであり、加地は「穴回り」と訳している。

17 加地による整理以外にも「穴」を論じる立場はあるだろうが、ここでは立ち入ることはできない。たとえば Wake らは音楽などの録音に用いられる CD を例に、「穴」を「時空域(regions of spacetime)」と見なす解釈を提示している。「穴」を「力能」等の観点から考察するより新しい議論については(加地 2017)参照。

18 『ワードマップ 現代形而上学』では、「穴」の例として「ドーナツの穴」および「地軸」が挙げられている。同書二五七頁参照。

19 『ニュークリア・エイジ』については NA の略号を使用し、日本語版の頁数を記す。

20 訳者の村上は、「ホーム・スイート・ホール」を「埴生の家」と訳している。

21 文学作品における「穴」としては、たとえば村上春樹作品における「井戸」が挙げられよう。井上義夫によると、村上作品における「井戸」は、「作者の記憶の原初の体験を喚び起こす「みづ」と、垂直の距離に連環したその特殊な形状のために、村上春樹の創作世界で特殊な位置を得た」(井上 92)とされる。井上が村上作品に読み取るのは「井戸」だ

けでなく「みづ」および「川」の意義である（井上 90）。

²² 「パレルゴン」はデリダの『絵画における真理』で論じられる概念であり、本稿で言うところの「空洞」および「境界」の「現象学」という観点からの検討が今後の課題であるが、今回は立ち入ることができない。

²³ 森は「エピステーメー」を「必然」に関わる知、「テクネー」を「偶然」に関わる知と整理したうえで（森 130）、「科学」と「技術」の問いが「現代社会」の「課題」であると指摘する（森 147）。この見解は妥当であろう。ただし『ニュークリア・エイジ』の主人公が核に怯えて「鉛筆」を集めていたこと、そして「穴」を掘るということは、この「課題」と関係しているようには見えないにもかかわらず、人間存在にとっての重要性を持つようにも見える。「エピステーメー」という観点から考えるなら、ウィリアムの行動は「合理性」を欠いた愚かな行動でしかない。だがたとえば「原子力」技術が世界から消滅すれば、ウィリアム的な恐怖は消失するのだろうか。結局のところ、人間は自分には制御不能な「圧倒的なもの」（筆者はハイデガーの『形而上学入門』での「デイノン」（GA 40 158-159/170）を想起してしまうのだが）と向かい合わざるをえないのであって、「原子力」はその一例に過ぎないとも考えられるのではないだろうか。

文献表

ハイデガーの著作については以下の略号を用い、全集版は原書の頁数と邦訳の頁数、『存在と時間』については煩瑣を避けるため、原書の頁数のみを記す。

GA: *Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann, 1975-.

SuZ: *Sein und Zeit*, Niemeyer, 1967.

Andrew Wake, Joshua Spencer, Gregory Fowler, "Holes as Regions of Spacetime," *The Monist*, Volume 90, Issue 3, 1 July 2007, pp. 372-378.

Daniel Cordle, "In Dreams, In Imagination: Suspense, Anxiety and the Cold War in Tim O'Brien's *The Nuclear Age*," *Critical Survey*, volume 19, issue 2 (2007), pp. 101-120.

David K. Lewis, Stephanie R. Lewis, "Holes," *Australasian Journal of Philosophy* 48 (1970), pp. 206-212 (reprinted in David K. Lewis, *Philosophical Papers, Volume 1*, Oxford University Press, 1983, pp. 3-9).

Donald D. Hoffman, Whitman A. Richards, "Parts of Recognition," *Cognition* 18 (1985), pp. 65-96.

Georg Simmel, "Brücke und Tür," *Gesamtausgabe Bd. 12, Aufsätze und Abhandlungen 1909-1918, Bd. 1*, Frankfurt am Main, Suhrkamp, 2001, pp. 55-61. (ゲオルク・ジンメル「橋と扉」『ジンメル・コレクション』北川東子編訳・鈴木直訳、ちくま学芸文庫、一九九九年、八九頁 - 一〇〇頁)。

Jacques Derrida, *La Vérité en peinture*, Flammarion, 1978. (ジャック・デリダ『絵画における真理 (上) (下)』高橋允昭・阿部宏慈訳、法政大学出版局、一九九八年)。

John Mulvihill, "The Nuclear Age by Tim O'Brien," *Iowa Journal of Literary Studies* 7,(1986), pp. 169-171.

Joshua Hoffman, Gary S. Rosenkrantz, *Substance among Other Categories*, Cambridge University Press, 2007.

Simon Critchley, Reiner Schuermann, edited by Steven Levine, *On Heidegger's Being and Time*, Routledge, 2008. (サイモン・クリッチリー、ライナー・シュールマン『ハイデガー『存在と時間』を読む』串田純一訳、法政大学出版局、二〇一七年)。

Søren Riis, translated by Rebecca Walsh, *Unframing Martin Heidegger's Understanding Of Technology, On The Essential Connection Between Technology, Art, and History*, Lexington Books, 2018.

ティム・オブライエン『本当の戦争の話をしよう』村上春樹訳、文春文庫、一九九八年。

ティム・オブライエン『ニュークリア・エイジ』村上春樹訳、文春文庫、一九九四年。

ハイデガー・フォーラム編『ハイデガー事典』、昭和堂、二〇二一年。

マルティン・ハイデガー『技術とは何だろうか 三つの講演』森一郎訳、講談社学術文庫、二〇一九年。

秋富克哉『芸術と技術 ハイデッガーの問い』、創文社、二〇〇五年。

稲田知己「世界に住むということ」、秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編『ハイデガー読本』所収。

井上義夫『村上春樹と日本の「記憶」』、新潮社、一九九九年。

色川武大『百』、新潮文庫、一九九六年。

小田切建太郎『中動態・地平・竈 ハイデッガーの存在の思索をめぐる精神史的現象学』、法政大学出版局、二〇一八年。

柏端達也『現代形而上学入門』勁草書房、二〇一七年。

加地大介『穴と境界 存在論的探求』春秋社、二〇〇八年。

加地大介「穴の物象性と因果性」、『現代思想 二〇一七年十二月臨時増刊 総特集 分析哲学』所収、青土社、二〇一七年、七〇 - 七九頁。

門脇俊介『理由と空間の現象学』創文社、二〇〇二年。

串田純一『ハイデッガーと生き物の問題』、法政大学出版局、二〇一七年。

河野哲也『境界の現象学 始原の海から流体の存在論へ』、筑摩書房、二〇一四年。

須藤訓任『『存在と時間』第2篇評釈 本来性と時間性』、岩波書店、二〇二〇年。

鈴木生郎・秋葉剛史・谷川卓・倉田剛『ワードマップ 現代形而上学 分析哲学が問う、人・因果・存在の謎』、新曜社、二〇一七年。

高屋敷直広「生をあらわにする「身振り」」、『ハイデッガー・フォーラム vol. 15』、ハイデッガー・フォーラム編、二〇二一年。

森一郎『核時代のテクノロジー論 ハイデッガー『技術とは何だろうか』を読み直す』、現代書館、二〇二〇年。